

---

# 漁火屋台

久芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漁火屋台

### 【Nコード】

N8404K

### 【作者名】

久芳

### 【あらすじ】

大学二年の夏休み。進学のため地元から離れていた美和子は、彼氏の悠馬を連れて故郷の漁師町に帰ってくる。夏祭りの夜、海の方こうにぼつぼつと灯る漁火の中から、悠馬はひとつの不思議な屋台を見つけた……。

「海のむこうに、街があるみたいだ」

しみじみと呟いた悠馬の言葉に、あたしのお父さんがくわえ煙草でにやりと笑った。

「よし、じゃああそこに飲みに行くか」

「えっ、本当に街なんですか？」

期待をこめた声で話す悠馬に、あたしは笑いをかみ殺しながら違うと首をふった。

はじめて漁火を見る人をお父さんはいつも、こう言うてはからかうのだった。

海沿いの漁師町の、夏の夜の風物詩。

それはイカ釣り船の漁火が魅せる、夜の海に点々と浮かぶ小さな街の姿だった。

月明かりに照らされて浮かぶ深い藍の水平線に、ぼつり、ぼつりと光が灯り。それがどこまでも続いてまるで海の上に街があるかのように見せている。

なにもないはずの海に灯る明かりの正体は、イカを寄せるために照らす、漁船の漁火だった。

海のむこうでは漁師たちが汗を流しながら仕事をしているというのに、陸から見ればそれはまるで別世界のよう。あたしは夏にあられるこの漁火の街を、海沿いの道からぼんやり眺めるのがとても好きだった。

昼間は暑くてだるくなってしまうけど、夜の海は涼しくてむしろ

すこし肌寒い。浜から吹くささやかな潮風に、お父さんの煙草の煙が乗ってあたしの髪をさらっていく。

小さな田舎町の、小さな夏祭り。花火を見終わって、海沿いの道を歩きながら家に帰るのが、毎年恒例のあたしの『夏』だった。花火だけじゃだめだし、海だけでもいけない。この漁火の街がないと満足できない。

娘の彼氏に対する接し方のコツをようやくつかんだお父さんが、悠馬相手にあれこれうんちくをならべ語りはじめている。懸命にそれにあわせながら先を歩く悠馬に、あたしとお母さんは顔を見合わせて笑った。

「美和子。お母さんたち、まっすぐ帰るけど？」

「あたしたち、もうちょつとぶらぶらしてから帰るわ」

お母さんが、遅くなりすぎないようにと視線を送ってくる。あたしがそれにならずきで返すと、お母さんはなにか言いたげながらも、熱弁をふるうお父さんの腕を引いて話をさえぎってくれた。

お父さんも祭りのビールでだいぶ出来上がっているみたいで、よろめきながら歩くのを支えるふたりの姿はちよつといちゃついているようにも見える。それがまたなんだか微笑ましくて、あたしはにやつきながら見送り、ぼんやりと海を眺める悠馬の背を叩いた。

「お父さんと話すの、疲れるでしょ？」

「いや、漁火のこといろいろ教えてもらって、面白かった。漁火って、明るいところに寄ってくるイカの習性を利用してるんだな……」

悠馬もすっかり漁火の街に惚れ込んでしまったようで、立ち止まって海に釘付けになっている。彼もまたアルコールがはいってるけど、お父さんほどじゃない。あたしはすこし考えてから、悠馬の手を引いてコンクリートの道を外れた。

防波堤の切れ間から、砂浜に降りる。今日の海は穏やかで、水面に落ちる月明かりがどこまでも続いている。ちょうど引き潮の時間のように、ちょこちょこ岩が頭をだしているのが見えた。

「おー、すごい……」

夜の砂浜を歩くのははじめてのようで、悠馬はあたしに手を引かれたまま、スニーカーでしめった砂を蹴っていた。瞳はあいかわらず海に魅せられたままで、あたしが見上げてもこっちなんで見えない。

山とビルに囲まれて育った悠馬にとって、海はやっぱ新鮮なんだと思う。

「すごいな。本当に、あそこに街がある」

その呆然とした表情が、あたしはすこし不安だった。

夜の海は綺麗。

でも、見つめすぎると吞まれてしまう。

生活の中に海がなかった悠馬は、それを知らないようだった。

「あのね、悠馬……」

「美和子、あれ」

悠馬が、ふいに海を指さした。

「あれ。漁火じゃ、ない」

「え……？」

その指先につられて、あたしも海を見た。

海の方こうに浮かぶ漁火の街。

その中で、たしかにひとつだけそれとは違う灯りがあった。

目を凝らせば、それは漁火の街よりも陸に近く、波の上に浮いているのがわかる。灯りも、他の船よりも強くない。さっきまでまったく気づかなかったけど、悠馬に言われてようやくわかった。

「あれ、なんだろう？」

「船じゃないよね？」

手をつないだまま、海へと近づく。足に波がかかって濡れそうになって、岩にあがってつま先で立った。

手でひさしをつくって、あたしはじっと、その灯りを見つめる。

悠馬も眼鏡をくいとあげて、これでもかというくらい首を伸ばして見つめていた。

「……屋台？」

「あたしも、そう思う」  
海の上に、ぽつりと、屋台が浮かんでいた。

1

一昨年。高校を卒業して、あたしは田舎の漁師町を出て大学に進学した。

去年。はじめの年の夏休みは、一人の生活にいつぱいいつぱいになってホームシックになりながら実家に帰って、久しぶりに会ったお父さんとお母さんの前で泣かないようにするので精一杯だった。

今年。二年生の夏。あたしは彼氏を連れて、実家に帰った。

お父さんもお母さんも、悠馬の存在とにかく驚き戸惑っていたけれど、山育ちの彼に海を見せるため、と言ったらしぶしぶ納得してくれた。なにもあたしの帰省期間中ずつというわけではなくて、悠馬がいるのははじめの二泊三日だけ。その後彼はいったん大学に戻り、用事をすませてから自分の実家に帰る。あたしも残りの日は地元でゆっくりする。お互いのサークルや講習の都合で帰るのがちようどお盆のお祭り時期と重なってしまったというか、せつかくだからふたりでお祭りに行きたかったというか。

なにせひとり娘が初めてつれて帰った彼氏だったので、あたしは両親に変な気をつかわせないようにするので必死だった。

「……これ、どうなってるんだろっな？」

そんなあたしの奮闘を知ってか知らずか、悠馬はのんびりとした口調で足もとを見下ろしている。手はずつつないだままで、絶え間なく吹く潮風にお互い指先が冷えているけれど、あわさる手のひらはとてもあたたかった。

海の上に浮かんだ屋台に行くべく、あたしたちは海を渡っていた。不思議なことに、ふつうに海の上を歩いていた。屋台へ続く場所だけに、なにか見えない道のようなものができていたのだ。足が海に沈むこともなく、波につま先が濡れることもなく、ただただ見えない道が、屋台へとまっすぐに続いていた。

海の上に、透明なプラスチックかビニールで、道をつくっているのかもしれない。そう結論づけて、あたしたちはひたすら海の上を歩いていた。

「でもどうして、海の上なんかにあるんだろうな？」

「新しいお店なのかなあ？ お母さんもなにも言ってなかったけど

……」

あの屋台も、この道も、非現実的だということに、あたしも悠馬も気づいていた。なにかおかしい。怪しい。でも、気になる。夏休みの海で起きている、この不思議な出来事に好奇心をかきたてられて、歩くことをどうしてもやめられなかった。

「ま、海に落ちてもお互い泳げるしな」

「海とプールはぜんぜん違うんだよ。ここまで離れちゃったら、泳ぐのもほんとうに大変だし」

あたしは言つて、ふと陸を振り返る。いつの間にか、だいぶ離れてしまっていた。屋台があるのはさほど沖じゃないし、たどりついてもまだ陸が見えるところにあるんだらうけど。万が一海に落ちたら、足なんてぜったい届かないところにいる。

この、波の下にある海の世界。真っ暗でなにも見えなくて、その中をたくさん生き物が泳いでいる、空気のない世界。もし海に落ちて、この暗闇の海を泳いでる最中に、なにかが足に触れたとしたら。驚きよりも恐怖が勝るのだと思う。

もし、落ちたら。海面を見下ろして、あたしの腕にぞつと鳥肌が  
たつた。

嫌なことを考えてしまった。それをふりほどきたくて、悠馬の手  
を強く握る。悠馬はそれをあたしの甘えだと思ったのか、目が合う  
とにやりと笑ってキスをしてきた。



違う、と思ったけど、嫌ではない。ほんのリアルコールの残る唇を噛みながら、あたしは恐怖なんてすぐに消えて笑ってしまいそうになるのをぐっとこらえる。すっかりと手をつなぎながら歩き続けると、ようやく屋台が間近に迫ってきた。

あたしも悠馬も、船の上に屋台が乗っているものだと思っていた。けれどそこにある屋台は、船でもなんでもなかった。

漂ってくる香りでわかる。これはおでん屋台だ。よくテレビドラマなんかに出てくる、夜の駅前で赤い暖簾を下げた、車輪で移動できるリヤカーみたいな屋台だった。

海の上であるはずなのに。船に乗っていないというのに。屋台は沈むこともなく、車輪を水面の上にしっかりと立たせていた。波の動きに屋台を揺れさせながらも、沈む気配もまったくなく。暖簾の間から見え隠れする客用の椅子までもが、海の上に乗っていて。

不思議だった。

その不思議さを、あたしたちはあつさりと受け入れてしまっていた。

「いらっしやい」

屋台に近づくと、中から声が聞こえた。若い男性の声に、あたしと悠馬は顔を見合わせ、こくりとうなずいて暖簾をくぐった。

「ずいぶん、若い客がきたな」

くぐるなり、照明の明るさが目に染みた。外からだと暖簾に隠れてぼんやりはかない明かりだけど、屋台の狭い空間では、裸電球ひとつの輝きがとても強く感じる。湯気がたちのぼって、すこし蒸し暑かった。

「あの、ここって……？」

「普通の屋台だよ。最近ぜんぜん客が来なくて閑古鳥が鳴いてたんだ。遠慮しないで座りな」

屋台の店主は声のとおり若い男性で、もちろんあたしたちよりは年上だけど、まだ三十路には達してないようだった。白いタオルをバンドナのように頭に巻き、目深すぎて目がほとんど見えない。すっと通った鼻筋や薄い唇と、茶色く染めた髪だけはちゃんと見えた。一瞬、こわい人かなと思った。けれどその屈託のない話しかたと唇からのぞく八重歯に愛嬌があつて、それにすこしほっと安心してあたしは椅子に座った。

悠馬はもう先に座ってしまっていた。そしてあたしが座ったのを見て、つないでいた手を離してしまう。それがちよつと心もとなくて、あたしは椅子を近づけて悠馬の隣にぴったり寄り添った。

悠馬はすっかり、屋台に夢中になってしまっていた。そもそも発見したのは彼だし、行こうと言ったのも彼だった。身体からわくわくと楽しそうな空気がにじみ出ている、屋台のお兄さんを興味深そうに見つめていた。

「なににする？」

「たまごがいいな」

「酒は？」

「飲みます」

「……ちよつと、悠馬」

さくさくとすすんでいく話に、あたしは思わず彼の膝を叩く。カウンターの上面にお皿を出され、箸を置かれ、注文まで始まって。いつの間にか飲むことにもなってしまうている。

屋台に来たんだからそういうつもりではあつたけど。でも、なんだか軽率すぎる気がした。

「いいじゃん、おいしそうだろ？」

「そりゃ、そうだけど……」

目の前で湯気をあげるおでんの鍋に、あたしもかなり誘惑されている。四角い鍋は鉄板で仕切られていて、たまごやがんもや、はんぺんやちくわが行儀よくぐつぐつ煮込まれている。あたしはおでんなら大根が好きだった。

「おふたり、名前は？」

「悠馬です」

「美和子、です……」

つい、お兄さんの雰囲気にもまれてしまう。ユウマとミワコか、と呟くお兄さんは、長い菜箸であたしと悠馬のお皿に大根を取り分けてくれた。

「ミワコ、酒は？」

「いえ、あたしは……」

悠馬はすでに日本酒をいただいて、嬉しそうに口をつけている。いちおうあたしたちはまだ十代なのだけど、大学のサークルなんだから、飲みにはすっかり慣れてしまっていた。

別にお兄さんに言わなければ未成年だつてばれないだろうし。どうせ今年で二十歳だし。悠馬は堂々と飲んでくれるけれど、あたしはなんだかお酒を飲む気分になれなくて、お兄さんがくれたオレンジジュースをちびりと舌でなめた。

「じゃんじゃん食べてけよ。お代はいらないからさ」

「えっ……」

「本当ですか？ やった！」

それって怪しくないだろうか。あたしはそう思うのだけど、悠馬は違うらしい。ぼったくられるのではとか、後々なにかが起きるのではないかとあたしは警戒してしまうけど、表情が顔に出ているのかお兄さんは八重歯を見せて笑った。

「どうせ今日はもう客こないだろうしさ。材料あまって捨てるのももったいないだろ？ 未成年に酒飲ませちゃってる時点で、こっちも仕事じゃなくなってるしな」

「あ……」

ばれていた。お兄さんの目には、大人ぶっているあたしたちのことなんてお見通しだったのだろう。

「だから、遠慮なく食べてけて。ミワコの好きな大根はいっぱいあるしさ」

「……はい」

あいかわらず目から上は隠れてしまっているけど、にやりと笑う唇に、悪いものは感じられない。すこしの間ためらったあと。あたしはおずおずと箸を伸ばした。

見るからに味が染みていそうな茶色い大根は、箸でつつくとすぐにほろりと崩れた。一口ぶんだけ切り分けて、口に運ぶ。隣ではもう、悠馬がひとつ完食していた。

「……おいしい」

「だろ？」

お兄さんと悠馬と、ふたりの声が重なる。ふたりそろってにやにや面白そうな表情を浮かべて、なんだかくやしいけれど、あたしは食べることをやめられなかった。

お母さんの味とも、コンビニの味とも違う、屋台の味。こんなにおいしいおでん、今まで食べたことがない。

箸がとまらなくて、切り分ける一口も大きくなって。あたしはあつという間にぺろりとたいらげてしまった。

「次は、たまごかい？」

「うん。染みてるやつがいい」

悠馬のリクエストで、今度はお皿にたまごを乗せてもらう。すぐに箸をつきたてるかと思っていたら、彼はいったん箸を置いて、おもむろにジーンズのポケットからケータイを取り出した。

「彩ちゃんに？」

「うん、そう」

ぱしゃり、とケータイが鳴る。たまごの写メをとり、いそいそとメールを打ち始めた悠馬には、地元の高校に通うふたつ年下の可愛い妹がいた。

彩ちゃんには、あたしも会ったことがある。おしゃべり好きで、悠馬と同じ二重まぶたの、可愛い子だった。よく彩ちゃんから何気ない日常をおさめた写真付きのメールが届くので、悠馬もこうしてたまにメールを送るのだった。

きつと、『このおでんうまいぞ』という、簡潔な文章を書くのだと思う。悠馬のそんな様子を、お兄さんはものめずらしげに見ていた。

「……おし、送った」

言って、悠馬はケータイをポケットにしまう。そしてあらためて「いただきます」と手をあわせて、たまごに箸をいれた。

「やっぱ、うまいわ」

一口食べるなり、ほんとうに嬉しそうに、黒縁眼鏡の奥の目を細める。一度食べるととまらないようで、息つく間もなくあつという間に食べ終えてしまう。次のはんぺんをもらうと、それもまたほんの三口で胃の中におさめた。

「ミワコも食べるよ」

「食べてるよ」

あたしだって食べている。ただ、悠馬のペースについていけないだけ。たまごは黄身がほくほくでおいしいし、味もよく染みている。濃すぎず薄すぎない味付けは飽きないし、喉を潤すオレンジジュースもまた新鮮でおいしかった。

それぞれ違うものを食べていると、悠馬が「それ、なに？」と訊いてくる。あたしがこんにやくの最後の一口食べさせると、見かねたお兄さんが同じものを悠馬に取り分けた。

「遠慮しないで食べよ。腹いっぱいになって帰ってくれな」

そう言って、お兄さんはあたしたちの皿を空にしない。そんなにお腹がすいていたわけでもないのに次から次へとたくさん口に運べて、酔いのまわった悠馬とお兄さんの会話を聞いているのがとても面白かった。

はじめの警戒心は、いつしか薄れつつあった。

「でもほんと、この屋台、不思議ですよね……」

あたしがしみじみ呟くと、お兄さんが「だろ？」と笑った。

「なんで、海の上に浮いてるんでしょう？ 海の上も歩けたし、なんか板みたいなの浮かべてるんですか？」

「それは企業秘密だから言えないんだな」

笑って流しながら、お兄さんがジューズのおかわりをくれる。悠馬の顔はすっかり赤くなって、目もとろんとしはじめた。あたしの肩におでこをのせて、じゃれついてくる。

「こんなところにお店があるなんて、あたしぜんぜん知りませんでした」

「そんなに宣伝とかしてないからな。道行く人が見つけてくれるだけいいんだよ」

「でも、こんなにおいしいのにもつたいない……」

「ミワコがそう思ってくれるだけで十分だ」

ほんのり頬を染めて、お兄さんが言う。照れ隠しか、お皿にしろたきを乗せてくれた。

「夜の海って、あたし、なんか怖いイメージがあっただんです。遠くから漁火を見るのはとても好きなんですけど、近くに行くと暗くてなんか、呑み込まれそうで」

「だから美和子、さつきすこしためらってたのか？」

顔をあげた悠馬は、ようやく気づいたようで、目を軽く見開いていた。でもその目も赤くなっていて、だいぶ眠いであろうことが伝わってくる。

「俺は海、好きだぞ？ 地球の半分以上は海なんだ。地球は青いんだぞ？」

だいぶ呂律もまわらなくなっている。けれど彼は話すのをやめず、あたしの肩を抱いてははと大きな声で笑った。

「俺、海に憧れてたんだ。ずっと山ばかり見てたからさ、海のあるところに住んでた美和子がすごいうらやましかったんだよな」

「そんなに？」

「海は綺麗だし、魚はおいしいし。晴れた海なんてさ、太陽の光が反射してきらきら輝いてるんだぞ？ 夕陽が沈むときは海まで真っ赤に染まるんだ。海の中には魚が泳いで、海草がゆらゆら揺れて、イソギンチャクが触手をにゆるにゆる出しててさ。俺、将来絶対ダイビングやりたいんだよな」

一息でそう熱く語る悠馬に、あたしとお兄さんはそろって笑った。海が身近にあるあたしたちにとって、海を見て受ける感動なんてたかがしれている。むしろ潮風に肌や髪が傷んで、車も錆びやすくなることのほうが心配で。嵐がきたら高波が危なくて、地震があれば津波の危険がある、やっかいな一面のほうに身染みていた。

「夜の海とか、すごい綺麗なんだな。月の光がさ、海から浜辺までずっと広がってるんだよ。そんなの俺テレビとか写真でしか見たことなかったのに、今日は漁火まで見れたし！」

最高じゃん！ 悠馬が叫ぶ。上機嫌に身体を揺らして、絡まれたあたしは苦笑を隠せなかった。

「でもね、悠馬。夜の海は、けっこう危ないんだよ？」

昼間の青く輝く海と、夜の深い闇を溶かした海は違う。夜に海面をじっと見つめていると、海に呑みこまれてしまうとあたしは小さくまで近づこうとせず、一定の距離をおいて眺めるのが一番だと思っていた。もちろん、今もそう思っている。

「夜の海も、近づきかたを知れば、こわくないさ」

お兄さんは、ただそう言って笑っただけだった。

最後の最後でぼったくられるかと思っていたのに。本当にお代はただだった。

来た道と同じように、海の上を渡って、浜に戻った。帰り道ではもう、なんで海の上を歩けるんだろうとか、そういうことはほとんど気にしなくなっていた。

「悠馬、大丈夫？」

「へーき、へえき」

足取りのおぼつかない悠馬は、あたしとつないだ手をぶんぶんとふって、まるで子供みたいに歌までうたって歩いていた。

「うまかったな、おでん」



「そうだね」

「花火も綺麗だったし、漁火も綺麗だったし。俺、来てよかったわ」  
「ほんと？」

砂浜からあがって、もとの道路に戻る。海沿いの道は民家が転々と続いているから、悠馬の歌声が近所迷惑になるのではないかとあたしはちよつと心配だった。

海から離れて、遠くから眺めると。屋台の中では存在をすっかり忘れていた漁火が、沖で再びきらめいていた。

遠目に見ると、屋台がまたまぎれてしまつてよくわからなくなる。屋台とお兄さんがどうやって浜に戻るのか、ちよつと考えてみたけどやっぱりよくわからなかった。

「悠馬、明日ちゃんと帰れる？」

「だいじょーぶ」

悠馬は今晚一泊して、明日になったらバスで大学に戻る予定でいる。バスの時間は早朝の一番目だから、これから寝てもほとんど時間がないはずで、これだけ酔っている悠馬がちゃんと復活できるのか不安になる。

「もし無理だったら、バスの時間遅くして寝てつてもうちは大丈夫だからね？」

「いや、でも、美和子のお父さんが落ち着かないだろ」

さすが悠馬、酔っていてもあのぎこちない空気だけは覚えているらしい。彼は人当たりがいいからさつとお父さんの懐に入り込んでなじんだけど、それでも彼女の実家に来るということだけでそうとう神経をつかったと思う。

自然と、つなぐ手に力がこもる。悠馬を見上げて目が合うと、お互い笑みがこぼれる。海にばかり気をとられていた彼が、ようやくあたしのもとに戻ってきたような気がした。

ああ、よかった。そう安堵の息をつこうとして、あたしの胃が急に痙攣した。

「うっ」

つないだ手を離して、とつさに両手で口を覆う。それでも喉もとをこみあげてくるなにかはおさまらなくて、たまらずあたしは道端に逃げこんだ。

「……美和子？」

胃が暴れでもしているかのように、ひどい吐き気がする。身体がなにかを必死に吐き出そうとしているようで、こらえようとしてもえづくだけでまったく意味がない。

喉をせりあがってくる酸味に負けて、あたしは草むらに嘔吐した。げほ、げほ、と時おり咳き込んで、食べたもの飲んだものを次から次へと吐いていく。その苦しさに涙まで出てきて、嗚咽のような声を漏らすあたしの背中を、悠馬がそつとさすってくれた。

「大丈夫か？ めずらしいな美和子が」

あたしはお酒に酔っても、吐いたことがなかった。むしろいつもこうして吐くのは悠馬のほうで、介抱するのあたしの役目だったはずなのに。

ましてや今日は、お酒もほとんど飲んでいない。屋台にいる間に波に揺られて、船酔いのような感じになっていたのかもしれない。

吐き氣にくわえて頭痛までしてきて、あたしは落ち着くのにしばらく時間がかかった。

その間ずっと背中をさすって声をかけてくれた悠馬は、だいぶ酔いがさめてしまったようだ。胃から吐くものがなくなったのを確認すると、あたしを軽々と背中に乗せて家までの帰り道を歩いてくれた。

悠馬の広い背中から、あたしはほんやりと海を眺める。漁火のつくりだす海の街は、まだまだ消えることなく輝き続けていた。

漁火は好き。

でも、夜の海はこわい。

ずっと見ているとまた具合が悪くなりそうで、あたしは悠馬の背中に顔をうずめた。

「美和子、いい加減起きなさい」

お母さんに部屋のカーテンを勢いよく開けられて、あたしはまぶたをさす太陽の光に思わず顔を覆った。

「二日酔いになるまで飲むんじゃないの」

「……そもそもあたし飲んでないもん」

まだかすかに痛みの残る頭をおさえて、あたしは布団から出る。枕もとの目覚まし時計を見ると、もう十一時をまわっていた。

昨日、お風呂に入らず服のまま寝たから、身体に潮の香りが残ってしまっている。それにまた具合が悪くなりそうで、あたしはすぐにＴシャツを脱いだ。

「悠馬、は……？」

「ちゃんとお父さんが駅まで送ってったから。あとでちゃんと連絡いれときなさいよ」

結局昨晚、あたしは悠馬に背負われたまま家に帰って、意識をなくすようにぱたりと眠ってしまった。昏々と眠り続けた間に、何度か悠馬や親と話した記憶もあるのだけど、夢と現実がまざってしまつてどれが本当のことなのかさっぱりわからない。

悠馬の見送りはできなかった。布団から動けないあたしのかわりに、お父さんが悠馬を駅まで送ってくれた。いや、いちおう動こうとは思ったのだけど、よほどあたしがひどい様子だったのか悠馬から『寝てなさい』と言われたから甘えたわけでもあつて。

彼もかなり飲んでいたはずだから、ちゃんと見送って二日酔いになつていないか確認したかったのに。

「今日は高校に顔出しに行くんじゃないの？」

「うん……行くよ」

この身体の鈍さは、昨日の体調不良の余韻なのか、それともただの寝すぎなのか。ギシギシときしむ身体を動かして服を脱ぎ、あたしはひとまずシャワーを浴びることにした。

久しぶりの里帰り。毎日家でぐうたらするかと思いきや、けつこ  
う予定がはいっている。今日は母校に行って担任だった先生のところ  
に顔を出す約束をしているし、地元の友達から遊ぼうと誘いのメ  
ールがいくつも入っている。お母さんたちとしては娘を家において  
おきたいようだけど、あたしだって久しぶりに友達に会いたかった。  
半裸の状態で家の中をうろついて、行儀が悪いとお母さんに怒ら  
れる。バスタオルを肩にかけてお風呂場に行き、痛む頭をふらつか  
せながら下着を脱ぎ、いざ浴室にはいるうとして、あたしは足をと  
めた。

「……？」

なにかが、背中に触れた気がした。

ぞろりと、冷たい感触。それは肩にかけたタオルの感触では、決  
して、ない。

なにか、指のようなものが肌を伝ったような。体温とは違う生あ  
たかさが、肩甲骨のあたりにかすかに残っている。

後ろには、誰もいない。いるわけが、ない。

「お母さん、先生から連絡きたら言っただけ！」

あたしは決して後ろを振り返るまいと浴室にとびこみ、蛇口をひ  
ねって冷たいシャワーを頭から浴びた。

「何よ美和子、彼氏来てたんなら教えてくれないじゃない！」  
久しぶりに会った友達は、学生時代の面影も薄くなり、眉を綺麗にととのえて髪にはパーマまでかかっていた。

「だって、あっちも忙しかったしさ。下手に一緒にいるところ見られてみんなになんか言われるの嫌だったんだもん」

「まあ、たしかにね。こんな田舎だとさ、ちよつと男の子と歩いてるだけで彼氏かとか結婚はいつだとか言われるしね」

千由紀の家に遊びに行くのは、高校を卒業して以来だった。漁師の娘の彼女は、ちょうど夏祭りのときに悠馬と歩いた、海沿いの道のところに家がある。高校を卒業後、そのまま地元の漁業協同組合に就職して、最近ようやく仕事にもなれて余裕ができてきたようだった。

「千由紀は、彼氏とかいないの？」

「いないよー。いつも漁師のおじちゃんたちにいいようにいじられてるけど、そこらへんはさっぱりだね」

千由紀の部屋で、ふたりでベッドを背もたれにして座り、テレビを見ながらあれこれ喋る。高校時代は毎日のようにしていたことなのに、地元を出ると当たり前前だけではできるわけがなくて。お互い高校時代に戻ったような気がして、担任の先生やほかの教科の先生の思い出話に華が咲いていた。

「ゆうまくん、だっけ？ 彼氏はいつあっちの実家に戻るの？」

「たしか、今日戻るはずなんだけどね。忙しいやつだからさ、メー

ルしても全然返事くれないのさ」

悠馬からきた最後のメールは、あたしが寝込んでいるときにお父さんに送られて、バス待ちのときに送信したらしきものだった。『体調、大丈夫か？ ゆっくり休めよ』とまた文面が本当にぶっきらぼうで、そのあとあたしが返事を送っても、さっぱり返ってこないまま一週間がたとうとしている。

悠馬は悠馬で大学のサークルやらボランティアやらに所属しているから、忙しいのはわかってる。付き合ってるくせに、頻繁にメールをくれるわけでもなく、すっぱかされることのほうが多いぐらいで。だからこそ夏休みぐらい、すこしはふたりでゆっくりしようと約束して一緒にあたしの地元に戻ったんだけど。

一週間も音沙汰ないのは、なんだか不安になる。

「ゆうまくん、都会の人？ こっちの田舎っぷりにびっくりしてたんじゃない？」

「いや、悠馬も地方の子だよ。ただ、山ばかりのところに住んだから、こっち来て海見てやたら感動してたもん」

悠馬の地元とあたしの地元を比べれば、あたしのほうが断然田舎だった。コンビニや生協はほかの町と共通してるけど、メジャーなスーパーやレンタルビデオショップはまず、ない。信号機も町内に三つしかないし、カラオケも一時間でけっこうな金額になる。進学当初それを大学の友達に話したら啞然とされたので、あたしはなるべく自分から地元の話をしないようにしていた。

地元を出て苦労したのは、環境の違いだったと思う。なにせこちららはバスが一時間に一本出るかどうか。車がないとそうとう苦労するし、休日になったら日用品を安く買うために隣町まででかけたりもする。だからあたしは高校にいる間に免許をとったけど、都会にでると車がなくてもぜんぜんやっていけた。

都会の人ごみや生活に疲れて、地元に戻りたくなって。泣いていたあたしにそつと声をかけてくれたのは、他でもない悠馬だった。

彼も彼で、入学当初はやっぱり環境の違いに戸惑っていたようで。

弱っていたあたしが落ち着くまで、いつもそつとそばにいてくれた。たぶん彼も寂しくて、あたしも頼れる人を必要としていたから、ちようどお互い寄り添うようなかたちになっていたんだと思う。

そうこうしているうちに、あたしもどうにか生活になれ。自分は都会のきらびやかなお嬢様たちについていけないと完全に悟ったころ、あたしと同じく疲れを見せ始めたほかの地方組の子達と仲良くなり。

そして悠馬と付き合うことになった。

「私もお金ためて、仕事探しにそつち出ようかな……」

あたしがそうこうしている間も、地元ではちゃんと、同じぶんだけ時間が流れていた。高校時代にあれだけつるんでいた千由紀と離れても、彼女の時間が止まるわけじゃなくて。千由紀には千由紀の生活があつて、卒業して数ヶ月こそために連絡をとっていたけど、最近では誕生日にメールを送るぐらいの仲でしかなかった。

それぐらい、お互いに自分の生活にいっぱいいっぱいになっていた。

久しぶりに再会するまでの間に、千由紀も仕事でいろいろあったらしい。高卒で地元就職するのはめずらしくないけれど、やつぱり世間の荒波は辛かったよう。ふつくらとした頬は細くなつたし、化粧を覚えたのだつてきつとおしゃれのためだけじゃない。煙草まで吸うようになったらしく、けれどあたしの前では気をつかって吸おうとしなかった。

「……そういえば悠馬、漁火見てすごい感動してたんだよ」

「イカ釣りの？」

前はテーブルの上にならぶのはジュースとお菓子ばかりだったのに。今は飲み物が缶チューハイに変わっている。千由紀はビールも飲めるらしいけど、あたしはまだ苦くてだめだった。

「やつぱり、山育ちには海ってなんでもめずらしいんだろうね。言ってくれたら、私のお父さんに頼んでイカ釣りの船に乗せてあげたのに」

それにあははと笑って、あたしはふとあの屋台を思い出した。

地元に残っている千由紀なんだから、海の上に浮かぶおでん屋台の存在も知っているに違いない。訊いてみようかと思い、でもなぜか、あたしはその話題を唇に乗せることができなかった。

屋台の記憶を、消そうとしている自分がいる。あれだけ悠馬と楽しく過ごしたのに、それを忘れようとしてしまう。いや、楽しみを自分のものだけにして、鍵をかけてしまいたいのもかもしれない。

あの屋台は、不思議すぎた。

「……美和子？」

ふと黙り込んだあたしの顔を、千由紀がのぞきこんでくる。酔った？ と訊かれて、あたしはうつんと首をふった。

「千由紀、最近仕事、どう？」

「まあ、ぼちぼちかな。相変わらず上司はセクハラしてくるし、先輩はすっごいむかつくよ」

それに対する仕返し of 武勇伝を語りながら、千由紀が笑う。その笑顔だけは前と変わらなくて、あたしはほっとした。

「仕事、事務だっけ？」

「そう、金融課だから窓口ばかりだけど。一緒に入った男子は、水産課で魚運んだりなんだりで毎日肉体労働だけだね」

酔いがまわったようだとろんとまぶたをとろけはじめた千由紀が、身体を横たえてあたしの膝に頭を乗せてくる。控えめだった彼女がいつの間に膝枕なんていうスキルを身につけたのか、驚きながらもあたしはその頭を撫でた。

このまま眠ってしまうのかなと思うぐらい、千由紀はしばらくの間、動きも喋りもしなかった。

「……私さ、いま、彼氏がいるのね」

「そうなの？ おめでとう」

「彼氏っていうか、まあまだ微妙なだけだよ。年上で、漁師でね。いつも船に乗ってることのほうが多いんだ」

だから普段は、あまり会えないらしい。連絡先はわかるけど、彼



の下船の時間と千由紀の生活時間が合わないようで、月に一度会えるか会えないかでなかなかすれ違いが多いようだった。

「いつだろう……最近っていうほどでもないんだけどね。沖の漁で事故があつて、彼と同じぐらいの年の人たちがさ、船から落ちて行方不明になっちゃったんだよね。漁組にいるとそういう情報ってやつぱり頻繁に入るから、なんかたまにすごく不安になっちゃうんだ」

「まだ、見つかってないの？」

「見つかった人もいるんだけどさ。ここらへんの町の人じゃないから名前とかわかんないけど、もう搜索もしなくなってきたみたいだし……」

知らなかった。やっぱり親は、娘が帰ってきてても地元の人の情報しか教えてくれない。千由紀のふんわりとカールした髪を指でいじりながら、あたしはぼんやりと相槌をうった。

「美和子……」

千由紀はあたしの膝の上で寝返りをうったかと思うと、太ももに顔をうずめて、その細い肩をふるわせはじめた。

「いつか、さ。彼もそういうふうな、海に落ちて帰ってこなかったらどうしようって思うと、すごくこわくなるの」

「千由紀……」

「私、お父さんが漁に行く時だって、不安になったりすることがあるの。それこそ事故の話聞いたりするとよけいに心配になつてね。今回も彼が船に乗るとき、行かないでって、言っちゃいそうだったの」

でも、千由紀は言わなかった。

漁師は自然を相手に仕事をしている。大学に通うあたしとはまず、違う。陸の上で働く千由紀とも、違う。

海があれば、どこでも働ける。

けれどいつも、海の危険と隣り合わせで働いている。

あたしの家は漁師じゃなくただの公務員だから、お父さんの仕事内容に不安を感じることはまったくなかった。けれど千由紀のように、海で働く家族がいると、やっぱりいつもどこか不安なんだろう。晴れ渡って凪げた海はとても穏やかだけど、時化た海は本当に危ない。あの高波の中操業する漁船が、いつひっくりかえってしまうかと、見ていて不安になる。

あの海に落ちたら、人なんてほんとうにちっぽけだ。

海水浴ができる、足がついて遊べる浜辺なんて実はとても少ない。ダイビングで潜れる綺麗な海も、ほんとうに数えるぐらいしかない。海は綺麗で、豊かで、そしてこわい。

うっかり深みに落ちてしまったら、まず足はつかない。それで頭が混乱しているうちに、波が来て海底に身体をおしこまれる。息をつく暇なんてほとんどなくて、どうにか身体を浮かせようとするだけで精一杯。

あたしは子供のころ、海で溺れたことがある。だから、よくわかる。

そのときはまだ浅瀬に近いところだったし、気づいたお父さんがすぐに助けてくれたので命に関わるような大事にはなかった。トラウマになるほどでもなくて、別に今はふつうに、プールでも海で泳ぐこともできる。

ただたまに、考えてぞっとすることがある。

もし、海で溺れたら。

そのまま死んでしまったら。

そうしたら自分の身体は、海の底に沈んでしまう。

救助が来て、身体を早く発見されればまだいいほうだ。

でも、もし、発見されなかったら。

あたしの身体はずっと海の底に転がっているわけで。潮の流れにもみくちやにされて、海底の岩に身体をうちつけてどんどん傷だらけになっていくわけで。

そして海に住む、貝や魚のえさになるわけで。

手や足の指先は、真っ先に腐ってそこから食べられていく。でもきつと、身体の中で一番やわらかいのは目玉で。はやいうちにあたしの眼球はなくなって、そのうち眼窩を魚が行き来するようになるんだと思う。

お腹の皮も食い破られて、内臓を引き出されて。衣服もぼろぼろになって、あちこち骨がむき出しになって。きつと海水を吸った顔はむくんで面影なんて全然わからなくなってしまつて、身体のうちここに貝やイソギンチャクがはりついて侵食されていくに違いない。そしてそのまま、海の一部になっていくしか、ない。

けれどもし、その状態でも誰かに発見されたとしたら。

漁船がごくまれに、海で亡くなった人の遺体を水揚げすることがある。それは不吉なことではなく、漁師の間では幸運なことだといわれている。

けれどその遺体は、きつと腐敗して今にも崩れそうになっているわけで。腕をつかんだだけでも上げてしまつかもしれない。むしろ、腕がなくなっている可能性だつてある。

そんな状態で発見された自分。

でも家族は、その姿がどんなに無残であろうとも、遺体が見つかったことを喜ぶに違いなかった。

「……千由紀？」

涙がとまらないようで、千由紀の涙があたしのジーンズを濡らしでいく。そうとう溜め込んでいたのが見て取れて、泣かせてあげようと思い、あたしはただ頭を撫で続けた。

千由紀はこわいんだ。もし、彼がそうなってしまったときのことを考えたら。

悠馬は、海の楽しいことばかりしか知らない。でもあたしたちは、こわいことも知っている。

だから、あの屋台に行くのがとてもこわかった。もし道が崩れて落ちてしまったら、あの暗い海に呑みこまれてしまったから。

落ちなくても。ただ見つめるだけでも。夜の海には、引き込む力がある。だからそつと、浜辺から、ぼんやりとながめるぐらいがちょうどいい。

「だいじょうぶ、千由紀。こわくないよ」

なかば自分に言い聞かせるかのように、あたしはずっと、千由紀の頭を撫で続けた。

千由紀が落ち着くまでそばにいと、帰る時間がすっかり遅くなってしまうた。

泊まってもいいよと彼女は言ってくれたのだけど、翌朝から家族で買い物に行く約束をしている。すつぽかしたら絶対怒られるし、なによりそれを楽しみにしている両親に申し訳なかった。

だからあたしは、深夜の海沿いの道を、ひとりで歩いていた。

いちおう外灯はあるけれど、蛾の飛び交う電球は今にも消えてしまいそうなぐらい点滅しているのがほとんどで。夏の時期の漁師の家はみんな早くに寝てしまうから、カーテンのすき間から漏れる明かりも少なくて。

夏祭りのときとは、ぜんぜん雰囲気が違う。ひとりで歩くのとはとても心細かった。

とにかく明かりがほしくて、あたしはケータイを開いて、液晶の明かりで道を照らして歩いた。夜が更けすぎたのか、虫の鳴き声もほとんど聞こえなくて、穏やかな波の音が響いて逆に不気味だった。明かりなら、海にもある。今晚もまた、イカ釣り漁船がでて、星

空と海の間を漁火が点々ともっていた。

でも、あの街は遠すぎる。あたしはあの街には行けない。

あの街はにせものだ。深い闇の海の上で、命をはりながら働く漁師たちの、命の輝きだ。

あの深い海の中に住む、魚や貝やたくさんの生き物と、その死骸が眠る深い深い世界の上で、ちっぽけな人間が懸命に生きている証の輝きだ。

「……？」

じつと海を見据えていたあたしは、ふと、漁火とは違う明かりを海面に見つけた。

屋台だった。

あの屋台が、また、ある。それも千由紀の家のすぐそばに。なのに千由紀は会話の最中、屋台についてなにひとつ触れようとしなかった。

なにより、時間帯が違う。悠馬と行ったときは、まだ日付が変わっていなかった。でも今は、そんな時刻もとうに過ぎていて、店を開けるような時間であるわけもない。客なんてはいるわけがない。

「……やっぱり、変だよ」

あたしが呟くと、ざつと風がふいた。

海から来る、冷たい風ではなかった。人肌に近いような、生ぬるい風がまとわりつくように吹きつける。その風にはつとして、あたしはシャツから出る腕をぎゅつとにぎりしめた。

また、いる。

ここ最近、あたしは誰かにつけられていた。

それは決して、人ではない。気配でわかる。なにか黒い、影のよくなものが、終始あたしのそばにいて離れようとしないう。

誰かといるときは気にならない。けれどひとりになると、必ずあらわれる。

振り向くのが怖い。もしあの、外灯の下にいたらどうしよう。もし顔が見えたら。目があったら、どうしよう。

こわい。

「違う。だれも、いない」

あたしは自分に言い聞かせながら、走り出した。

屋台の光が、沖でぼんやりとともっている。

あそこに逃げるといふ手もある。でも、夜の海をひとりで渡る勇氣はない。

「違う、違う、違う」

ぶつぶつと呪文を唱えながら、あたしは家までの道を、ずっと走り、逃げ続けた。

影はその後ろをついてきた。

電話がかかってきたのは、家族との買い物から帰って、お風呂あがりにぼんやりとベッドでうたた寝していたころだった。

『美和子さん、今、電話しても大丈夫ですか？』

「彩ちゃん？」

電話の主は、悠馬の妹、彩ちゃんだった。

彩ちゃんとは、以前会ったときに連絡先を交換していた。それでもいつもはメールのやりとりだけで、電話がかかってくるのはとてもめずらしい。

「どうしたの？ なにかあった？」

『お兄ちゃん、予定どおりに、先週美和子さんのところから大学に戻ったんですね？』

「悠馬？」

電話越しにも伝わる、重い雰囲気。それにはっとして、あたしは彼女の小さな声を聞き逃すまいと耳をそばだてた。

『お兄ちゃん、昨日には帰ってくるはずだったのに、夜になっても今日になっても連絡ひとつないんです。ケータイにかけてもつながらなくて……それで美和子さんに聞いてみたんですけど』

「悠馬は、たしかに大学に戻ったはずだけど……？」

『連絡もなしに、帰りが遅くなるのはいつものことなんです。だから親もあまり心配してないんですけど、なんかわたし、心配で』

前に会ったときの彩ちゃんは、もっとはつらつとした話しかたをする子だった。けれど今は、消え入りそうな声で細々と話している。

その不安そうな声色がなんだか今の自分と似ているような気がして、あたしは放っておけなかった。

『……あの、美和子さん』

「なに？」

『お兄ちゃんと、おでん、食べたんですよ？』

「うん、食べたよ？」

悠馬からメールがいったから、彩ちゃんも知っているんだ。そうだとわかっていても、屋台の話題が出てきたことに、あたしはなぜかまたあの吐き気が蘇りそうになった。

「彩ちゃんに送ったの、たしかたまごの写メじゃなかった？」

『たまご……？』

「違うの？」

言いよどむ彩ちゃんに、あたしは自分の鼓動がはやくなっていくのがわかる。どうか、自分が恐れていることになりませんように。

そう祈るのだけど、無情にも彼女の声には届かなかった。

『送られてきたの、そんなんじゃないかったです……』

「どんなの、だったの？」

『なんか、あまり、言いたくなくて……すいません』

このままでは、本当に彩ちゃんの声が消えてしまう。そのかすれ声に、あたしはあわてて無理しないでと言った。

「まだその写メ、残ってる？ よかったら、あとであたしのほうに送ってもらえないかな？」

『……いいんですか？』

「悠馬のことはさ、心配いらないよ。おとつい電話したとき、大学のほうでいろいろ用事できたようなこと言ってたしね。そのうちひよっこり帰るかもしれないしさ」

『そう……ですよね』

「うん。だから、彩ちゃんもあまり思いつめないで。メール送ってくれたら、その写メも消しちゃっていいからね。悠馬にはあたしからちゃんと saying おくから」



下手に話せば、自分も何を喋るかわからない。すこし乱暴だったけれど、あたしはそこで通話を切った。

電話を終えても、胸騒ぎがおさまらない。胸の鼓動は早くて、息もすこし乱れているけど自分でとめられない。ぐつと唇を噛みしめて、あたしは半乾きの頭をふった。

彩ちゃんには嘘を言った。

これ以上心配させないほうがいいと思った。ほんとうは悠馬と電話もしていないし、連絡がとれていないのはあたしも一緒だった。

悠馬が、行方不明。

最後に悠馬を見送ったのはお父さんだったけど、バスに乗り込むところまで一緒にはいなかったらしい。ほとんど初対面のようなものなんだから、一緒にいても気をつかうだけだし。最後まで見送らなかったお父さんを責めるつもりはない。むしろ行かなかったあたしが悪い。

悠馬はバスに乗った。

そう、思いたかった。

「……来た」

ややあつてから、約束どおり彩ちゃんからメールが届いた。件名も本文もなにもなくて、ただ、お願いしていた写真だけが添付されていた。

悠馬と一緒に行った夜の海。

あの夢幻のような空間が現実にあったと、たしかに証明するこの写真。

「っ……」

あたしはそれを見て、こみあげてくるものをこらえるので精一杯だった。

親には友達に呼ばれたと嘘をついた。

あたしはサンダルをはくのもどかしく家を飛び出し、一目散にあの海沿いの道へと走り出していった。

ひとりになれば、あの影が必ず追ってくる。今晚もまた、あたしの後ろから気配がする。いつもはそれから逃げていたけれど、今は違う。心の中で、影がついてくるのを願っていた。

走れば、家から数分もかからずにあの道にはいることができる。あいかわらず誰もいなくて、虫の声と波の音だけがする、外灯の明かり今にも切れそうな薄暗く細い道だった。

あたしが帰ってから、地元の海はずっと穏やかだった。耳をすませば、寄せては返す波の音が静かに鼓膜を震わせてくる。磯の香りが強く鼻腔をくすぐって、潮まじりの風が髪をしめらせた。

走るのをやめ、あたしは外灯の下で、荒い息をつきながらうずくまった。

頭上では、蛾が何匹もはばたいている。あたしの肩にぶつかってくるのもいる。しじみのように地味で小さなものから、手のひらほどもあるペパーミントグリーンの蛾までが、消えかけの明かりの周りをぐるぐるぐるとまわりつづけている。

海には今日も、漁火がともっていた。水平線の上に、街ができていた。その先に陸があるのかと思うぐらい、にぎやかな街が、うずくまるあたしをじっと見つめているような気がした。

だいぶ呼吸が落ち着いてきても、あたしは顔をあげなかった。食べたものを道端に吐瀉したときのように、じっと外灯の下でうずくまり、さも自分が無防備であるかのように見せかけた。

さあ、来い。

心の中で、そう呼びかける。あたしの後ろばかりをつけてくる、あの影に向かって呼びかける。

いつも一定の距離を置いて、決して近づいてこようとしない影。あたしが逃げるとあわてて追いかけてきて、けれど立ち止まると怖気づいて動かなくなる、その黒い姿。

近づいてくるのを、あたしはじっと待った。

磯の香りのまじった生あたたかい風が、膝に顔をうずめるあたしの髪をさらっていく。あれはどうるさかったはずの虫の音が、遠ざかり、小さくなる。波の音だけは規則正しく、ざわめきのように砂をかいて静かに響いていた。

来い。

なかなか動かない影に、あたしは心の中で何度も念じる。はたして影はためらっているのか、それとも焦らしているのか。いつそ自分から動いてしまいたくなるけど、そうしたら影はきっと、逃げてしまふに違いない。

動きたくなる衝動をこらえるのに、あたしは自分の呼吸を数えた。ひとつ、ふたつ、みつと、数えてみてまだ自分の息が早いことに気づく。

疲れて早いわけじゃない。緊張して、呼吸が浅くなってしまっている。

数をどんなに数えようと、影は動く気配を見せない。しゃがんだ足が、すこしずつしびれはじめてくる。顔をうずめているから空気も薄くなってきて、それでもあたしは決して動かなかった。

お願いだから、来て。

唇を噛みしめて、口の中にそれが伝ってきて。ようやくあたしは、自分が泣いていることに気がついた。頬を、涙がいくつもいくつも伝ってくる。泣いていることに気づいたら、肩がふるえて、嗚咽まです漏れた。

その涙がどうして流れたものなのか、自分でもよくわからない。こわいのかもしれないし、悲しいのかもしれない。こうしてうずくまっていると、波の音がどんどん近づいてくる気がして、自分が海のすぐそばにいるような錯覚に襲われる。いつかそのまま、飲み込まれてしまうのではと思ってしまう。

夜の海が、こわい。

あたしの目から、またひとつ、涙があふれたとき。ようやく影が動いた。

「……………」

ひた、ひたと。耳をすませばかすかにそんな足音が聞こえてくる。影はまだ、夜闇に隠れて姿を現さない。けれどあたしに近づいてくれば、この外灯の下にくれば、その姿が見えるかもしれない。

動き出したくなる衝動を、あたしは腕に爪を立ててまでこらえる。足の感覚はもうなくなっていた。そして早かった呼吸は、影が動き始めたときに、自ら止めた。

あとすこし。あと、すこし。見えなくても、心で感じる。影が近づいてくる。そして、うずくまるあたしを見下ろしている。

微動だにしないあたしを心配して、そっと、手をのばしてくる。

「……っ！」

あたしは顔をあげ、その手をしかと掴んだ。

おどろいて逃げようとする影を、渾身の力で引き寄せる。外灯の光を浴びてもその姿は黒いままで、あたしは両手でその顔を包み込んだ。

「動かないで！」

狼狽して逃げようとする影が、あたしの一喝でおとなしくなる。

背の高い影は、あたしに顔をまさぐられて、困ったように両手を胸の前でさ迷わせていた。

うつすらと無精ひげの生えたあごに、かわいてささくれた薄い唇。

鼻梁の上に乗っているのは、きつと、眼鏡。

剛毛で、指に刺さる短い髪。厚い耳たぶ。たくましいうなじ。

確信して、あたしは影を抱きしめた。

「悠馬……」

影は、悠馬だった。

顔も服もわからないくらい、すべて真っ黒になってしまっているけど。墨を全身にこぼしたわけではなく、身体の内側から影がにじみ出たようで、完全に色を失ってしまったっているけれど。

指で触れればわかる。この姿かたちは、悠馬以外他ならない。

「気づかなくて、ごめんね」

抱きしめても、その身体から体温は伝わってこなかった。冷たい

わけでもなく、むしろ生あたたかくはある。けれど、それはあたしと同じように、身体が発する熱ではない。どんなに強く抱きしめても、伝わってくる鼓動は弱々しいままだった。

影　悠馬が、おずおずと腕をまわしてくる。耳元に唇を寄せてなにか動かしているけれど、その口から声は出なかった。

どうしてこうなっちゃったの？

そう訊こうとして、やめた。答えは自分の目で確かめたかった。

「……行こう、悠馬」

身体を離して、あたしは悠馬の手をとった。

お互いしっかりと手をつないで。あたしは悠馬を引っ張るように、道を外れて防波堤へと歩いた。

夏祭りの日と同じ、夜の砂浜におりる。

虫の声が聞こえない。生あたたかい風ばかりがふいている。磯の香りが強くて、けれど波はおだやかに寄せては返して岩の頭を撫でている。

海の方こうに浮かぶ、漁火の街。

その街から、ぼつりと離れたひとつの灯り。

あの屋台に、あたしたちはもう一度、行かなければならなかった。

#### 4

どんなにつなぐ力をこめても、悠馬の指先からは温度を感じなかった。

その肌ですら、あたしと違う。指をうずめると、そのままやぶれて突き抜けてしまいそうなくらい、もろい。存在までもが不確かで、何度も振り返らないと、いつか消えてしまいそうでこわかった。

あたしたちは再び、屋台への道を歩いていった。

陸にいたときはなんともなかったのに。海を渡りだしたとたん、

あたりに霧が立ち込め始めた。

急に視界が悪くなって、足元ですらおぼつかなくなる。あの日と同じように、低い波の上を、目には見えない何かが道を作っている。海面の揺れが足に伝わり、まるで不安定な平均台の上を歩いているような気分だった。

いなくなつていないかと悠馬を振り向くたびに、陸がどんどん離れていくのがわかる。やがて陸の明かりは濃霧にかき消されて、そしてあたしたちが歩く道もまた、後ろから崩れ去っていくのが、踵に迫る波しぶきでわかった。

もう、戻れない。

でも、あたしたちは行かなければならない。

道の先に、ぼんやりと明かりがもっている。霧に隠れて姿こそ曖昧だけど、暖簾のすき間から漏れる光はたしかにわかる。自分たちが屋台に近づいているとわかると、自然とつなぐ手にも力がこもった。

夏祭りの日と同じなのに。同じように手をつないで歩いているのに。

いま、心の中にあるのは好奇心でも期待でもなくて。不安と恐怖ばかりで、なかなか足が前にすすんでくれなくて。

それでもお互いの手の感触だけを頼りに、前をすすんだ。もう、ふりむいても悠馬の影は霧に隠れてほとんどわからなかった。

暗闇に霧がたちこめて、視界は前よりも、すこしだけ明るい。霧をかきわけ海を渡って、ようやくたどりついた屋台はやっぱりなんの変哲もないおでん屋台だった。

暖簾を手で広げて、中をのぞく。やっぱりお兄さんがいた。

白いタオルをバンダナがわりに、目深に巻いたお兄さんは、あたしと悠馬の影を見て、その大きな唇をにやりと歪めた。

「いらっしやい」

まずはじめに、においが鼻をついた。

つんと刺すような刺激臭に、果物が熟れたような甘い香りも混じっている。けれどなによりも、ひどくすえた臭いが屋台の中にたちこめていた。

「今日は、なんにする？」

席につくのをためらうあたしたちなど知らぬ顔で、お兄さんは鍋の具をすすめてくる。鼻で息をするのをやめたあたしは、目を背けなくなるのこらえて中をのぞきこんだ。

この前来たときは、おいしそうなおでんだったはずなのに。いま、あたしたちの目の前にあるのは、決して食べ物といえるものではなかった。

鍋からのぼる湯気はない。ぐつぐつと煮えるあぶくもない。ただそこにあるのは、切り刻まれて、汁に浸された具材のみ。

大根だと思っていたのは輪切りの手首足首で。

しらたきだと思っていたのは束ねられた頭髮で。

はんぺんだと思っていたのはどこかもわからない肉片で。

巾着だと思っていたのは内蔵の一部分で。

かまぼこは耳で。

牛すじは指先で。

こんにやくは、舌で。

ちくわは。

「うっ」

腐敗し、悪臭を放つ男性器に、あたしはたえられず口を覆った。

彩ちゃんから送られてきたたまごの写真は、まぎれもなく、腐りかけた人間の眼球だった。

「ミワコ、どうかしたか？」

お兄さんに話しかけられたけど、それどころではない。あたしはその場に嘔吐してしまいそうになるのをこらえるのに必死で、悠馬とつないだ手も離して両手で顔を覆った。

「具合が悪いのか？　なんか飲むか？」



親切で渡してくれたコップ。けれどその中にあるのは決して水ではなく。どす黒く変色して、腐敗した何かがまだらに浮かぶ、血液だった。

「……だめだ」

呟き、あたしは悠馬を引きずり暖簾を出た。

今にも吐いてしまいそうになるのを懸命にこらえて、あたしは悠馬の頭を乱暴につかんで引き寄せる。そのまま海面に手をつかせて、口の中に無理やり指をねじ込んだ。

あたしは、あのあと全部吐いた。だからもう身体にはほとんど残っていない。

けれど悠馬は食べて、そのまま身体に残った。だからきつと、こうなってしまったんだ。

抵抗しようともがく舌をおしのけ、口内をまさぐり喉を探す。そして指をありったけ奥におしやって、悠馬の身体がふるえるのを待った。

「っ！」

彼の吐き出すものまでもが、真っ黒な影に変わってしまった。げえげえと吐く声ですら聞こえなくて、ただ淡々と、悠馬の口から液体が吐き出されていた。

あたしたちが食べたのは、死んだ人間の身体だった。

腐敗して、死の影を強くまとった、人であつたはずの肉片だった。

「……ユウマ、ミワコ、大丈夫か？」

お兄さんの声が聞こえる。でも、あたしたちはこたえる余裕がなかった。

海の道は消えてしまっている。屋台のこのわずかなスペースだけが、あたしたちの立っていられる場所。このままここに残っていても、きつと潮の流れに乗って沖まで流されてしまふに違いない。

「聞いているか？」

暖簾ごしに話していたはずの声が、急に近くなった。

お兄さんがこちらに来たわけではない。暖簾が消えたのだった。

嘔吐を続ける悠馬の背をさすりながら振り向けば、屋台の姿は跡形なく消えていた。

屋台の向こうにいるはずだったお兄さんは、ただその場に立ち尽くして。鍋は消え、切り刻まれた肉片がぐしゃりと嫌な音を立てて足元に落ちる。海の底に沈むわけではなく、あたしたちと同様、その遺体も海の上に浮いていた。

食べるために切られたものはほんの一部分だったようで、まだ人の姿の残るものが多くあった。ぞつと寒気がしたのは左腕と思われるもので、ところどころ骨がむき出しになり、皮膚は変色して黒く縮み、えもいわれぬ液体がその切り口から流れ出していた。

大きな肉の塊から、長い縄のようなものが出ている。それが一体何なのかを考えたくなくて、あたしは血がにじむほど唇を噛んだ。

「……どうして、ですか？」

「なにがだい？ ミワコ」

水面に膝をつくあたしたちを、お兄さんがあざ笑うかのように見下ろしてくる。あいかわらず、目が見えない。だから、くわしい表情がわからない。

「なんで、こんなこと……」

どうしてあたしたちが、人の亡骸を食べなければならないのか。目の前にいる、この男性が、かつて生きていた証をなぜ口にしなければならぬのか。

「蘇るためだよ」

彼の口から出た言葉は、ぞつとするほど冷たかった。

「生きた人間に、死んだ自分の身体を食べさせたら。そうしたら、おれは蘇れるんだ」

彼はきつと、千由紀が話していた、この海で行方不明になった乗組員に違いない。地元の人ではなく、仕事のためにやってきたほかの地域の人だ。

「生きた人間が、死んだ人間の肉を食うとな。肉がそいつの『生』を吸いとってこっちに運んでくれるんだ。だから見てみる、ユウマはもう、ほとんど生きちゃいない」

嘔吐と空咳を繰り返す悠馬を見て、彼は笑った。

「ミワコはだめだったみたいだけど、そいつは簡単だった。夜明け

のバスに乗るときに、ちょっと沖から声をかけてみたんだ。そうしたらまたのこのことやってきて、ひとりでうまいうまいってたらふく食っていったさ」

やっぱり。悠馬はバスに乗らずに、この町に残ったんだ。この屋台に来て、たくさん、お兄さんの身体を食べたんだ。

「そのうち自分が影になって、ようやく気づいたころにやあもう遅かった。身体もなくなって、声も失って、困ってミワコのそばに行つて、でもどうしていいかわからなくて後をつけることしかできなかった。……違うか、ミワコまで屋台に行かないよう見張ってたのか？」

訊かれても、悠馬はこたえられない。悠馬が失った生も、声も、すべては彼に奪われてしまったのだから。

「ユウマがたらふく食ってくれたおかげでな。おれの身体もあと少しで戻るようになる。お前らがあとひとくちふたくち食ってくれりゃあ、お前らの命と引き換えに、おれが陸に戻るのさ」

低い笑い声をもらして、彼はおもむろに足元の腕を拾い上げた。

「さあ、食べ」

腐敗して関節までもが変色して、今にももげ落ちてしまいそうな腕を、彼はあたしの口元につきだしてくる。たしかにその顔色は、前に会ったときよりも数段よくなっている。それは悠馬の生を吸ったからに違いない。

「食べ。そしてお前たちが海に消えればいい」

唇に触れそうになる指先。もう、何本かの指はなくなってしまうている。指が落ちてむき出しになった関節の上を、ミミズのような岩虫が這っている。

これが、海に沈んだ人の姿。

「ぜったい、嫌！」

あたしはその腕を力いっぱいはねのけた。

手に、力ない肉の感触が残る。硬くはない。死後硬直も終えて、弛緩してしまった身体。海水を吸い、ぶよぶよにふやけてしまった

身体。体温もすべて失い、ただ、冷たくなってしまった身体の一部の、肉片。

それは彼の手から抜けて、海へと落ちていった。ぼちゃんも鈍い音がして、あつというまに深みに沈んでいった。

あの腕はもう、海の上には戻らない。また海の底に転がって、魚や貝たちの餌になっていく。残った骨もいずれは砕け、砂となり、海の一部になっていく。

「お前……！」

激昂した男性が、あたしを強く睨みつける。負けじとあたしも睨み返した。

どうしよう。どうしたらいい。

見えない瞳を睨み続けながら、あたしは考える。逃げなければ、と、それだけはわかっていた。

でも、どうやったら悠馬がもとに戻れるのかわからない。

きっと彼は教えてくれやしない。今ここで逃げたとしても、解決法がわからなければ悠馬はもとに戻らない。一生影のまま、あたしのそばにいる運命だけには、絶対にさせちゃいけない。

「もう、逃げられない。あきらめろ」

「ぜつたい、嫌」

悠馬は死んだ身体を食べて、彼に自分の生を吸い取られてしまった。もうこの影の身体には、ほとんど生が残っていないのだ。

「逃げて、ユウマはもとに戻らないぞ」

「ぜつたい、もとに戻すもの」

じゃあ悠馬も、生を吸収すればいいんだ。

気づいた瞬間、あたしは迷いなく、自分の右手に歯をたてた。

「！ お前」

彼の焦る声が聞こえる。でもそんなの気にしない。ためらってはいけないと思い、あたしは手の甲の弾力ある皮膚を、力いっぱい噛みちぎった。

口の中に残った肉はすぐに吐き出した。歯形どおりにえぐれた手

の甲からはすぐに血があふれ出し、あたしはこぼれ落ちる前に傷口を悠馬の口元につきつける。事態を飲み込めていない悠馬の唇を無理やり開いて、問答無用であたしの血を流し込んだ。

「悠馬、飲んで！」

吐き出そうとするのを、怒鳴ってやめさせる。次から次へとあふれる血潮のすべてを悠馬の口に流し込み、あたしは吐き出させないようあごをつかんで上向かせる。

「やめろ……！」

彼が、阻止しようと動くのは遅く。悠馬の喉仏が、ごくりとあたしの血を嚥下した。

あたしは今、生きている。この血にはあたしの『生』が宿っている。悠馬の身体だってまだ完全に死んだわけじゃないから、なにかきっかけさえあれば、化学反応のように生を取り戻してくれるに違いない。

崩れ落ちる悠馬の身体を抱きとめ。不思議と痛みを感じない右手を、あたしは左手で包み込む。そしてもう一度、彼を見上げた。

「あたしたちは、あなたの身代わりにはならない！」

「……お前ら！」

彼が怒りの雄叫びを上げた瞬間、足元の海が崩れた。

あたしたちは、海に落ちた。

気を失ったのか、力のない悠馬の身体を抱き、あたしは海から顔を出した。

「っは！」

口の中に残る海水を吐き出し、新しい息を吸おうにも身体がすぐに沈んでしまいそうになる。悠馬の顔まであげさせる余裕なんてなかった。自分の息をつぐのですらむずかしくて、あたしは沈みそうになる身体でもがいて懸命に浮上させた。

屋台も、男性も、消えてしまっていた。深い霧のたちこめる海のと真ん中で、あたしは自分がどこに向かって泳げばいいのかまったくわからなかった。

陸に行かなければ。

でも、陸がどっかわからない。

下手に泳いで、もし沖へ行ってしまったら。戻ってくるぶんだけ体力を消耗して、陸まで泳げなくなってしまう。

陸はどっち。

陸の明かりが見えない。

このままでは、あたしたちは溺れ死んでしまう。

「誰か……！」

くるはずもない助けを求めるあたしの頭上を、冷たい風が吹いた。「だれか……！」

生ぬるくは、ない。冷たい、海の潮風。それがあたしの濡れた髪を撫で、そして霧をさらっていく。

星空が見えた。視界が晴れた。

「ああ……！」

あたしはこれほど、あの灯かりに感謝したことがなかった。

霧が晴れたおかげで、沖の漁火が見えはじめる。点々と灯る、白や橙の熱く燃えるような輝き。海で汗を流す、漁師たちの命の灯が、今またあたしの目の前に蘇ってくる。

あの街は、にせものだ。

にせものの街に背を向けて泳げば、ほんものの街に戻ることができるとは違いない。

あたしは悠馬の身体を抱えなおし、力をふりしぼって波をかいだ。

海とプールでは、泳ぎ方がまったく違ってくる。

プールは足がつく。でも海はつかない。

プールには波がない。でも海にはある。

足がつかないところを泳ぎ続けるのは、とても体力を消耗する。

足はずっと水を蹴り続けて、手は波をかきわけ続ける。

泳ぐのをやめてはいけない。やめたら身体が沈んでしまう。

陸から見える波が低くても、いざ海面におりれば波はとても高い。白波が立たずとも、そのわずかな山ですらあたしたちの身体を飲み込もうと容赦なく襲ってくる。

何度あきらめそうになったかわからない。けれどあたしは、泳ぎ続けていた。

決して早くはない。すすんでいるのかですら自分にもわからない。けれど身体は懸命に海を泳ぎ、陸に戻ろうと動いていた。

陸に戻るんだ。

戻って、生きるんだ。

頭の中で、そればかり繰り返す。陸が見えないとか、苦しいとか、疲れたとか。そう思ったらもう泳げなくなるのがわかっていた。

身体はもう限界。気力だけで動いているようなものだった。

あたしは今、生きている。

生きているから、身体が動く。生きているから、息ができる。

生きているからこそ、苦しくて。疲れて。力尽きそうになって。

けれど心臓は、しっかりと鼓動を刻み血潮を身体中にめぐらせていく。

大丈夫。あたしはまだ、やれる。

そう心で叫んで、水を蹴った足首を、何者かに掴まれ渾身の力で



引っ張られた。

「いやっ！」

そのまま、海に引きずり込まれそうになる。抵抗もむなく、あたしの顔は海に沈んだ。

悠馬だけは離しちゃいけない。だから、手の力だけはけっして緩めない。けれど疲れきった身体は、引きずり込もうとする力から逃げるができなかった。

消えたはずの彼が、あたしの足を引っ張っていた。

『行かせない！』

声にならない声が、海の中、あたしの頭に伝わってくる。低く、かすれた声が、直接脳髄に響いてくる。

『行かせやしない！』

彼のその姿は、すっかり変わり果てたものになってしまっていた。海に消え、海に侵食されそうになっている身体。腐敗し、朽ちかけた手足。頭のタオルはなくなり、両の眼は眼窩がむきだしになっている。頭髮もほとんど残っておらず、頭皮もはがれ、頭蓋骨が見えて穴まであいていた。

『おれひとりを、残していくなんて！』

開いた口の中は、歯が何本かなくなっている。片方の八重歯は抜け落ちていた。舌はもうなく、上顎にフジツボがはりついていた。

「離して！」

そうあたしが叫んでも、その声は海中に響かない。ただいたずらに肺の中の空気を無駄にするだけで、意識が遠のきそうになるのを早めるだけだった。

仄暗い海の底に、ひきずりこまれていくあたしの身体。あたしだけではない、悠馬も一緒だ。彼の身体はいぜん影のままで、息をしているのか心臓が動いているのか、抱きかかえていてもさっぱりわからなかった。

「助けて……」

最後の悪あがきに見上げた海面は、月明かりに照らされて残酷に

もきらきらと輝いて見える。あとすこし頑張つて水をかいて、引きずり込もうとする手を振りほどいて、もがきにもがけば手にはいる世界がすぐそばにあるはずなのに。

人は、海の中では生きていけない。

魚や貝たちとは違う。空気がなければ生きていけない。踏みしめる大地がなければ生きていけない。

深い深い海の底では、けっして、生きていけない。

『行かないで！』

彼の声は、いつしか懇願に変わっていた。

この深い海の底で、横たわらなければならない、生を失った身体。二度と陸には戻れず、海の一部になるしかない、朽ち果ててゆく身体。

肉片がいかにはかの生き物の血肉に変わろうとも。骨だけは、残される。

そしてそれが砕け、砂となり、広大な海の中に溶け込むしかない、さだめ。

『ひとりにしないで！』

その悲痛な叫びに、あたしはただ、うめくしかできなかった。彼と一緒に、海に沈むのは嫌だ。

けれどもう、陸に戻る力は残っていない。

最後の息が、尽きそうになる。目に浮かんだ涙は、海に溶けて消えてしまった。

自分の身体も、この涙のように、なくなってしまふんだ。そう思うと、悔しくてまた涙があふれた。そして、まぶたの力が抜けはじめる。

「美和子！」

閉ざされようとしていたまぶたの動きが、その声に、止まった。腕の中にいたはずの悠馬が、動いていた。彼はその力強い腕で、沈みゆくとしていたあたしの身体をしっかりと抱きかかえた。

あれほどあたしが求めてやまなかった力が、彼にはまだ残ってい

た。ひとつふたつと水をかいて、浮上した悠馬はあたしの顔を海から引き上げてくれた。

「っ、う」

大量に海水を飲んでいて、うまく息を吸うことができない。うめくあたしが海に沈まないよう支え続けながら、悠馬は泳ぎだした。

「泳ぐんだ、美和子。手でかいて。足で蹴って。できるところまで一緒に泳ごう」

呼吸が落ち着かなくて、意識も朦朧としたままで。それでもあたしは、悠馬の声に導かれるまま身体を動かした。

悠馬の姿がどうなったのか。気にする余裕なんてなかった。ただ、声が戻ったことには気づいた。噛みちぎった自分の手がどうなったかなんて、どうでもよかった。

「ありがとう、美和子」

その声に、涙が出た。

悠馬に支えられながら、あたしは海を泳いだ。手で波をかいだ。足で水を蹴った。

大丈夫。

自分はまだ、生きている。

最後のほうはついにあたしも力尽きて、悠馬ひとりで泳いだようなものだった。

それでもどうにか陸が見え、足がつくようになったときは、本当に嬉しかった。

お互い支えあうように肩を組んで、ずるずると重い身体を引きずり。ようやく波の届かない浜辺までたどり着いたとき、糸が切れたように二人で倒れこんだ。

大量の海水を飲んで、喉が焼け付くように熱かった。肺にも大量の水が流れ込んでいて、げげげほと咳き込みながら吐き出している

と、悠馬がそつと背中をさすってくれた。彼のほうこそ長い間海中にいたはずなのに、なぜかほとんど水を飲まなかったようだった。

「大丈夫か？ 美和子」

「……うん」

気遣う声にも、曖昧にしか返せない。ただただ疲れ切って、あたしはこのまま気を失ってしまいそうだった。

「ゆうま……」

「うん？」

「生きてる？」

「……生きてるよ」

眼鏡こそなくなってしまうたけれど。目の前にいる悠馬は、たしかに、生きている悠馬だった。

「ありがとう、美和子」

「うん……」

頭を撫でてくる手は、ちゃんとあたたかい。肌もある。今にも消えたりしない。ちゃんと、ここにいる。

あたしも、悠馬も、ちゃんと生きている。

「よかった……」

抱きしめてくれる悠馬の胸に身体を寄せようとして、あたしはふと、思い出した。

足首に残る感触。それがまだ、消えていない。

悠馬もそれを思い出したようで、はっと二人で顔を見合わせる。

お互いひとりで確認する勇気がなくて、目で合図をして一緒に見た。足首を掴んだ手。それは名残ではない。まだたしかに残っている。身体を起こし、見た先にいたのは、

彼、だった。

「……よかった」

あたしの口を最初についた言葉は、それだった。

海の中で見た姿のまま。あたしたちが食べたはずのところも、ちゃんともに戻っている。もちろん失ったところのほうがいいけれど、それでも彼の身体は陸に戻ってきた。

ふと気がついて、自分の手を見てみると。噛みちぎったはずの手の甲は、なにこともなかったかのように綺麗なままだった。

あたしがそつと足を動かすと、彼の手はすぐに離れた。その残された指先は、もう二度と、動くことがなかった。

「……とりあえず」

「警察、呼ばなきゃ」

「救急車も」

「お母さんに、電話……」

「ケータイ、水没してる……」

はつきりしない頭のまま、ふたりでのろのろと動き出す。指一本動かすだけでも大変で、なんとか上半身を起こしたところでふと気づいた。

「……空が」

満天の星が瞬いていたはずの空が、白み始めていた。

海を見れば、漁火の街はもう消えていた。

そして水平線の向こうから、かすかに、輝きが見え始めていた。

「朝日だ……」

呆然と、悠馬が呟く。

その太陽の光は、漁火がかすんでしまうほど強い、すべての命の光だった。

end

5

まず、親にこっぴどく叱られた。

今年で二十歳にもなるうというのに、怒られるあたしたちはやっぱり子供だった。病院のベッドの上で、懇々と説教されて看護師さんたちにくすくすと笑われた。

なぜ大学に戻ったはずの悠馬まで一緒にいるのか。それを話し出すとややこしくなるので黙っていたけれど、両親ともなにも言わなかったので内心ほっとした。

とりあえず。あたしたちは海で遊んで溺れたということにした。

そしてどうにか泳いで陸に戻ったとき、偶然、打ち揚げられた遺体を見つけたのだということにした。

彼、は、やはり千由紀の話していた行方不明の船員だったようで、身元もすぐに判明して遺族のもとへと戻っていった。

沖で消えたはずなのに、潮の流れに乗って浜辺に打ち上げられた男性の遺体。よほど陸に戻りたかったのだらうと、噂する漁師の人たちが話していた。

結局あたしたちは、彼の名前も素顔も知らぬままだったけど、知らないほうがいいだらうと思う心が密かにあった。

「悠馬、準備いい？」

両親の説教のおかげで、里帰りの最後の数日は、家にとじこめら

れていた。

海で溺れたという件もあり、すこし身体を休めなさいと言われ、悠馬も家に滞在した。彼は実家には帰れなかったけれど、ちゃんと連絡をいれさせた。ケータイが修理から戻ったら、ちゃんと彩ちゃんにもメールをいれて、あの写真を忘れるぐらい可愛い画像をたくさん添付してあげようと思う。

あたしたちが溺れた話を千由紀も聞いたのか、連絡が来たけれど、彼女も仕事があったので会えなかった。仕事が終わってからのは、千由紀も彼氏に会う貴重な時間にまわしていたし、そうすべきだと思った。

「もうすぐ、出発するよ？」

大学まで送ると言う両親を丁重に断って、あたしたちは一緒にバスで帰ることにした。

「忘れ物はないか？」

「身体に気をつけなさいよ」

あれこれ言い足りないようで、両親が窓の外から次から次へと言葉を投稿ってくる。それにひとつひとつ返事をしているうちに、出発時刻になり、扉を閉めたバスがゆっくりと動き始めた。

荷物は通路の向かい側に置いて、あたしは悠馬と二人で座り、窓からばいばいと手をふった。お父さんもお母さんも、寂しそうな悲しそうな心配そうな複雑な表情を浮かべながら手をふり返してくれた。

バスは海沿いの国道を走る。早朝の便に乗って、行きは途中で寝ていくつもりだった。

けれど悠馬は窓際で、また食い入るように海を見つめていた。

今朝は綺麗な朝焼けだった。

「……悠馬、きれい？」

「うん、綺麗」

海を見つめるその視線に、あたしはもう、不安を抱かなくなった。悠馬は、海を知った。

やさしい海と、こわい海を知った。  
明るい海と、暗い海を知った。  
海の中にある、生と、死を知った。

あたしたちは陸の上で、今日も大地を踏みしめ、生きてゆく。

E  
N  
D



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8404k/>

---

漁火屋台

2011年1月23日17時41分発行